Heisenberg Model に於ける Green 関数法

東教大理 小 口 明 秀 (2月12日受理)

§ 1. 序

Heisenberg model に対する Green 関数理論は、Tjablikov の R.P.A 以来、様々の decoupling が試みられて、異なった結果を与えている。しか し全温度領域で、物理的な結果を与えている近似は、R.P.A. が一番良いと思 われるが, 低温に於てスピン波の振動数の温度依存性が磁化σに比例し, その 結果 T^{3/2}の振舞をして, magnon 近似の T ^{5/}2 と異なっている。M.Bloch は Dyson-Maleev 変換によるボーズ粒子による Dyson Hamiltonian を基 にして、HF近似を用いて、低温では Dvson の結果とほぼ一致する結果を得 た。それによるとスピン波の振動数は $ext{T}^{\frac{5}{2}}$ に比例しているが、相転移が first order で、近似は温度上昇とともに悪くなっている。また、解が当然 みたすべき磁化の磁場に対する反対称性、 $\sigma(H) = -\sigma(-H)$ をみたしていない。 分子場は変分(Free-energy 極少)をみたしているのに対して、R.P.A, 及びその他の decoupling による近似が、変分をみたしているかどうかは明 らかでない。相転移の様な問題を扱う時には、特に変分をみたしている事が必 要であり、decouplingによる定性的にも異なった結果は、この要求によっ て、選択されるはずである。我々は、新しい Green 関数 を用いて Heisenberg model を考えてみた。紅果は低温では、スピン波の振動数が、M.Bloch に一致する $T^{5/2}$ 依存性を持ち、1次元、2次元で自発磁化がなく、3次元で Curie 温度 T_c が分子場と一致し、 $\sigma(H) = -\sigma(-H)$ をみたす。近似 Eq.(6)は, K. Sawada の変分法⁴⁾により, Eq.(6)となる model Hamiltonian H_0 があれば変分となっている。しかし H_0 (15) が近似として加わる為に、 Free-energy 極少をみたしているか明らかでない。只,低温で boson Hamiltonian の HF近似 (変分をみたす) に Spin エネルギーが一致し、 Curie 温度が分子場(変分をみたす)に一致している事は、何らかの変分を 示唆していると思われる。

小口明秀

§ 2. Green 関数

 $S = \frac{1}{2} \mathcal{O}$ Heisenberg Hamiltonian

$$H = -9 \mu H \sum_{f} S_{f}^{Z} - \sum_{f,m} I(f-m) S_{f} \cdot S_{m}$$
 (1)

を Pauli operator

$$S_{f}^{+} = b_{f}, \quad S_{f}^{-} = b_{f}^{+}, \quad S_{f}^{z} = \frac{1}{2} - b_{f}^{+} b_{f} = \frac{1}{2} - n_{f}$$
 (2)

を用いて書きなおすと,次の様になる。

$$H = \epsilon_{0} + \sum_{f} (J(0) + 9\mu H) n_{f} - \sum_{f,m} I(f-m) b_{f}^{+} b_{m} - \sum_{f,m} I(f-m) n_{f}^{-} n_{m}$$

$$- \sum_{f,m} I(f-m) n_{f}^{-} n_{m}$$
(3)

ととで

$$I(f-m) = \frac{1}{N} \sum_{q} J(q) e^{i q (f-m)}$$

$$\varepsilon_{0} = -\frac{1}{4} NJ(0) - \frac{1}{2} g \mu H N \qquad (4.)$$

また、Hは外場で、添字 f,m 等は site number である。Pauli operator は次の交換関係を持っている。

$$\left(b_{f}, b_{m}^{+}\right) = \delta_{f, m} \left(1 - 2n_{f}\right) = \delta_{f, m} \sigma_{f}$$
 (5)

t時間の operator を O時間の operator で展開して次の近似をとる。

$$\theta(t) b_{g}(t) = \sum_{f} G_{gf}(t) b_{f}$$
 (6)

近似の意味は展開を第一項のみで切った事にあり、普通の cose, fermi型 の交換関係の operator の時は (6) の近似は、H.F.A となるが、今の場合 (5) によって近似は、H.F.A 以上を意味している。 (6) の展開係数を Green 関数と呼ぶ。それは (6) 式の両辺と p_f^+ の commutator を作り平均をとる と、

Heisenberg Model に於ける Green 関数法

$$\sigma_{\mathcal{G}_{g,\mathbf{f}}}(\mathbf{t}) = \langle (\theta(\mathbf{t}) \, \mathbf{b}_{g}(\mathbf{t}), \, \mathbf{b}_{\mathbf{f}}^{+}) \rangle \tag{7}$$

となる事より明らかである。ここで並進対称性を考えて $<\sigma_{
m f}>=\sigma$ とした。 (6) 式より

$$i\frac{d}{dt}\theta(t)b_{g}(t) = i\delta(t)b_{g} + \{\theta(t)b_{g}(t),H\}$$

$$= i\delta(t)b_{g} + \sum_{f}G_{gf}(t)\{b_{f},H\}$$
(8)

(8) 式の両辺と \mathfrak{b}_{ℓ}^+ との commutator を作り平均をとって (7) を代入すると

$$i\frac{d}{dt} \sigma G_{g\ell}(t) = i \sigma \delta_{g\ell} \delta(t) + \sigma G_{g\ell}(t) (g \mu H + J(0))$$

$$- \sigma \sum_{f} G_{gf} I(f-\ell) + 2G_{g\ell}(t) \sum_{m} I(\ell-n) < b_{\ell}^{+} b_{m} >$$

$$- \sum_{f} G_{gf} t 2 I(f-\ell) < b_{\ell}^{+} b_{f} > + 2 < n > \sum_{f} G_{gf}(t) I(f-\ell)$$

$$- 2 < n > \sum_{m} G_{g\ell}(t) I(\ell-m) + 4 \sum_{m} G_{g\ell}(t) I(\ell-m) < n_{\ell} n_{m} >$$

$$- 4 \sum_{f} G_{gf} t I (f-\ell) < n_{f} n_{\ell} >.$$
(9)

並進対称性より、逆格子ベクトルにフーリエ変換すると

$$G_{gf}(\omega) = \frac{1}{N} \sum_{q} G_{q}(\omega) e^{iq(g-f)}$$

(9) 4 9

$$G_{\mathbf{q}}(\omega) = \frac{i}{2\pi} \frac{1}{\omega - \epsilon_{\mathbf{q}}} \tag{10}$$

ととで

$$\varepsilon_{q} = 9 \mu_{H} + (J(0) - J(q)) \left(1 - \frac{2n}{\sigma}\right) + \frac{2}{N\sigma} \sum_{p} (J(p) - J(p-q)) \langle p^{+} p \rangle_{p} + \frac{4}{N\sigma} \sum_{p} (J(p) - J(p-q)) \langle n n \rangle_{p}$$
(11)

b > p は Fluctuation - Dissipation 定理より

小口明秀

$$\langle b^{\dagger}b \rangle_{p} = \int f(\omega) \, \sigma \left(G_{p}(\omega + i\varepsilon) - G_{p}(\omega - i\varepsilon) \right) d\omega$$

$$= \sigma f(\varepsilon_{p}) = \sigma f_{p} \qquad (12)$$

ととで

$$f_{p} = \frac{1}{e^{\beta \epsilon_{p-1}}}$$

nearest neighbour のみの interaction を考えると

$$\sum_{p} (J(p) - J(p-q)) \langle n n \rangle_{p} = \frac{J(0) - J(q)}{J(0)} \sum_{p} J(p) \langle n n \rangle_{p}$$

$$\equiv \eta_{q} \sum_{p} J(p) \langle n n \rangle_{p}$$
(13)

Hamiltonian & b

$$\Sigma_{f} < v_{f}^{+}(v_{f}, H) > = (9 \mu H + J(0)) \sum_{f} r_{f} - \sum_{fm} I(f - m) < v_{f}^{+} v_{m} >$$

$$- 2 \sum_{f, m} I(f - m) < r_{m} r_{f} >$$
(14)

Green 関数を使って

$$\sum_{q} \sigma f_{q} \epsilon_{q} = (\mathcal{G} \mu H + J(0)) N \langle n \rangle - \sum_{p} J(p) \langle b^{\dagger} b \rangle_{p}$$

$$- 2 \sum_{q} J(p) \langle n n \rangle_{p}$$
(15)

(11),(13)を(15)に代入して $\sum_p J(p) < nn >_p$ を求めて,(11)に代入すると

$$\epsilon_{q} = g \mu_{H} + (J(0) - J(q)) / K \qquad (16)$$

ととで,

$$K = 1 + \frac{2}{N} \sum_{p} \frac{J(0) - J(p)}{J(0)} f_{p}$$
 (17)

(10), (12), (16) 及び (17) より

$$\frac{1}{\sigma} = \frac{1}{N} \sum_{p} \coth \frac{\beta \epsilon_{p}}{2} \tag{18}$$

$$\epsilon_{p} = 9 \mu H + (J(0) - J(q))/K$$

$$= g \mu_{H} + \frac{\sigma \left(J(0) - J(p)\right)}{1 - \frac{\sigma}{NJ(0)} \sum_{j} J(q) \circ th \frac{\beta \varepsilon_{q}}{2}}$$
(19)

この解は $\sigma(H) = -\sigma(-H)$ をみたし Tjablikov の

$$\varepsilon_{p} = 9 \mu H + \sigma (J(0) - J(p))$$

に比してエネルギーの繰込 factor がつけ加わっている。

§ 3. 低温展開

(18) Lb

$$\sigma = \frac{1}{1 + 2P} = 1 - 2P + 4P^2 + \dots$$
 (20)

$$P = \frac{1}{N} \sum_{p} f_{p} = \frac{1}{N} \sum_{p} \sum_{p} e^{-(n+1)\beta \epsilon}$$
(21)

$$= Z(\frac{3}{2}) (\theta K)^{\frac{3}{2}} + \frac{3\pi}{4} Z(\frac{5}{2}) (\theta K)^{\frac{5}{2}} + \frac{33}{32} \pi^{2} Z(\frac{7}{2}) (\theta K)^{\frac{7}{2}} + \cdots$$

ととで

$$\theta = \frac{T}{4\pi J}, \quad Z(\frac{\alpha}{2}) = \sum_{n} \frac{e^{-n\theta \mu H \beta}}{(n)^{\alpha/2}}$$

本た

$$K = 1 + 2\pi Z(\frac{5}{2}) \theta^{\frac{5}{2}} + \dots$$
 (22)

(22)を(11),(21)に代入して

$$\varepsilon_{p} = g \mu_{H} + (J(0) - J(p)) (1 - 2\pi Z(\frac{5}{2}) \theta^{\frac{5}{2}} + \cdots)$$
(23)

$$P = Z'(\frac{3}{2}) \theta^{\frac{3}{2}} + \frac{3\pi}{4} Z(\frac{5}{2}) \theta^{\frac{5}{2}} + \frac{33}{32} \pi^{2} Z(\frac{7}{2}) \theta^{\frac{7}{2}} + 3\pi Z(\frac{3}{2}) Z(\frac{5}{2}) \theta^{4} + \cdots$$

$$(24)$$

小口明秀

(23) は M.Bloch 等の boson 近似と完全に一致して,正しい温度依存性を持っている。また, boson 近似として $\sigma=1-2P$ までとると Dyson の結果と一致するが, $\sigma=1-2P+4P^2+\cdots$ に代入すると fictitious な T^3 の term があらわれて

$$\sigma = 1 - 2 \left\{ Z\left(\frac{3}{2}\right) \theta^{\frac{3}{2}} + \frac{3\pi}{4} Z\left(\frac{5}{2}\right) \theta^{\frac{5}{2}} + \frac{33}{32} \pi^{2} Z\left(\frac{7}{2}\right) \theta^{\frac{7}{2}} \right\} + 4 Z\left(\frac{3}{2}\right)^{2} \theta^{3} + \dots$$

$$(25)$$

となる。

§ 4. Curie 温度

Curie 温度は H→O σ →O として求まる。

$$\frac{1}{\sigma} = \frac{1}{N} \sum_{p} \operatorname{cth} \frac{\beta \epsilon_{p}}{2} = \frac{2}{N\beta} \sum_{p} \frac{1}{\sigma(J(0) - J(p))} \left(1 - \frac{\sigma}{N} \sum_{q} \frac{J(q)}{J(0)} \operatorname{cth} \frac{\beta \epsilon_{q}}{2}\right)$$

$$= \frac{2}{\sigma\beta} F(-1) B \qquad (26)$$

ととで,

$$F(-1) = \frac{1}{N} \sum_{p} \frac{1}{J(p) - J(p)}$$
 (27)

及び

$$B = 1 - \frac{\sigma}{N} \sum_{q} \frac{J(q)}{J(0)} \operatorname{cth} \frac{\beta \varepsilon_{q}}{2} = 1 - \frac{\sigma}{N} \sum_{q} \frac{J(q)}{J(0)} \frac{2B}{\beta \sigma (J(0) - J(q))}$$
 (28)

(28) より B を求めて (26) に代入すると

$$\beta_{\rm c} J = \frac{1}{3} = 0.33$$
 (29)

自発磁化は(18)より 1 次元, 2 次元で積分が発散して $\sigma=0$ となり存在しない。 3 次元の Curie 温度 $\beta_{\rm C} {\rm J}=0.33$ は分子場のそれと一致している。 また,(29)を(26)に代入して ${\rm T}<{\rm T}_{\rm C}$ での σ の温度変化を計算すると

$$\sigma \propto (T_c - T)^{-1/2}$$

となり、critical index β は $\beta = \frac{1}{2}$ となる。

§ 4. 討論

近似 Eq(6) は変分法 によれば,

$$\theta$$
(t) \mathbf{b}_{g} (t) = θ (t) $\mathbf{e}^{i \, \mathbf{t} \mathbf{H}_{0}} \mathbf{b}_{g} \mathbf{e}^{-i \, \mathbf{t} \mathbf{H}_{0}} = \sum_{f} \mathbf{G}_{gf}$ (t) \mathbf{b}_{f}

となる H_0 を仮定している事を意味し、その時日を H_0 におきかえる事は、Free energy stationary の変分をみたす。 Eq(14) 迄は H_0 の範囲で議論しているが、 $E_q(14)$ から(15)に移行する時、左辺を fluctuation 一 dissipation で計算する為、時間のずれた所で日を H_0 にすりかえなければならず、ことで変分が破れている。しかし結果は、序でも述べた様に、 Spin 波のエネルギーの温度変化は、 E_0 にのの HF近似(変分)と一致し、 E_0 には、分子場(変分)に一致している事から、何らかの方法で、 E_0 を一をできなので、検討中である。

終りに有益な議論をして下さった沢田先生に感謝します。

References

1) 例えば

S.Katura and T.Horiguchi J.Phys. Soc. Japan 25 60 (1968)

に詳しい解説がある。

- 2) M.Bloch J.Appl.Phys. 35 1151 (1963)
- 3) K. Sawada (private communication)
- 4) K. Sawada (to be published)